見てる、

武肋腱Jr.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
見てる、

【Ｎコード】
Ｎ７４３５Ｃ

【作者名】
武肋腱Ｊｒ．

【あらすじ】
気付いたら動けなくなっていた「私」は男を見ることにした。

いつからだろうか私はあの男をいつも同じ場所でみている、といっても私がいつも同じ場所にいるだけだが…。
私は男が食事をしているところしか見たことがない。男は何者なのだろうか？
男には彼女がいる、すごくきれいで上品な人だ。正直彼には勿体無い、それくらい美しい女性だ。
その彼女が来る日になると男は午前中に掃除をする、その行為が私には気に入らない…
彼女はいつも一時にやって来る、中に入り男としばらく話し込んだ後に一緒に外出する。
七時に男は戻ってきて少し掃除を始めた。
数分後さっきとは別の女性がやって来た、さっきの彼女と比べると少し見劣りするがやはり綺麗な女性だ。
その女性とは家の中で食事をして、家の中で彼女と…楽しいことをしている。
私はそんな生活を繰り返している男が嫌いだ、どうにかしてこの男を懲らしめたい。私はいつもそう思っていた。ある夜の晩、私は鼠に配線をかじって火事にしてくれるよう仕向けた。家を火事にするのは3日後に決めた。
次の日、男はいつものように午後一時に女性を連れてきた、終始和やかな雰囲気だった。
七時にもうひとりの女性がやって来た、彼女とは何か揉めていたようだが関係ないと思い無視した。
その次の日、いつもと様子が違っていた。
男は時間がないのだろうか、身支度もそこそこにして家を出ていった。それから何時間経っただろうか、部屋は黒一色となった。
それから間もなくして誰かがやってきた、顔は見えないがあの男で

はないということはわかった。
その男は部屋のことをよく知っているらしく、なんの迷いもなく棚にあるものを取り出した。
彼はスーツケースを持っていたので旅行に行っていたのだろうか、それなら何故あの男の家に行くのだろうか。
そう考えながら男を観察していると、突然ある仮説がうかんできた。
それはここにいる男がこの部屋の本当の住人で、今までここに居た男が侵入者というものだ。
そう思いながら私は男を観察し続けた、やがて夜があけた。
朝になると男は顔を洗うため洗面所に向かった。
すると何か見つけたらしく、それを持って戻ってきた。
眼鏡をかけてそれを見直し彼は喫驚した。
それは見慣れない男物の歯ブラシとリップクリームだった。
彼はここに誰かが住み着いていた、もしくはまだ住み着いていると考えたらしく携帯をかけだした、また彼の行動をみて私は自分の仮説が正しいということを知った。
しばらくして女性がやって来た、いつも午後一時にやって来るあの女性だ。
彼女はこの男と知り合いらしく親しげに話をしていて、しばらく会話をした後この男は少し困惑したがすぐに落ち着きだした。
その後いつも午後七時に来ていた女性がやって来た。
彼女もこの男と知り合いらしくやはり親しげに話しをしていて、上手くいったと彼女が言うと男は複雑な顔をしていた。
どうやら女性達はここに勝手に住み着いていた男、すなわち今日の朝までここにいた男を騙して追い出したらしい。
午後一時に来ていた女性はバッグやアクセサリーを男に貢がせ金を遣わせ、午後七時に来ていた女性は結婚詐欺をしていて、男はそれにまんまと引っ掛かり多額の借金を背負ったらしい。
おそらく男は詐欺に気付き借金の取り立てから逃れるためにここを去ったのだろう。

この日この男は女性達を家に泊めて一晩を過ごした。
その夜私は、明日この部屋を燃やしここにいる奴らを殺そうか考えた。
そもそも私は以前ここにいた例の男を殺すつもりだった。
しかし彼女達の行為もまた許しがたく殺す価値は相当にあった。
そもそもなぜ人間達は様々な生物を殺そうとするのだろうか、自分達に何か害を与えるものに対しては害虫と名付け殺す対象にする。
そもそも害虫と呼ばれる者たちは別に人間なんか相手にしていないし、自身が生き残る為に生活をしている。
その点では全く人間と変わらないと思う。
また、ある人間達は生物に対して保護したりする。
しかしその生物を守るために人間達はその生物の敵を殺そうとする。
なぜ彼らは生物に優劣をつけるのか、まぁ彼らはそうすることによって自分の存在を確立するのだろう。
しかし今ここにいる二人の女性は大罪を犯した、それは確かにいえることだ。
よって私はここを燃やす。
それに私はこの生活が飽きてきたのでそろそろ自由になりたいと思っていた。
私はそう考えながら夜を過ごした。
次の日の朝部屋は燃えた、男を含め三人が燃えた、私も燃えた。
消防士は三人の焼死体を部屋から出した。
部屋には粘ついた床によって動きが取れないでいた一匹のゴキブリが焼死していた。

（後書き）

完成した時に、掌編小説にしようとすればするほど長くなってしまうのはまとめる能力がないからなのかなぁと思った私がそこにいました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7435c/

見てる、

2011年1月27日03時24分発行